

〈9人の翻訳家〉の終盤、老書店主（ジョルジュ）は少年アレックスが『オリエント急行殺人事件』を万引きしようとするのを見とがめます。アレックスは、この本を途中までしか読んでいないので結末が知りたかったと言ひわけをします。老店主がそこで、「取引をしよう。あてたら本をやる。はずれたらここで働きなさい。『オリエント急行殺人事件』の犯人は？」と尋ねると、アレックスは「全員が犯人だ」と答えます。老店主は一瞬驚いた顔をしますが、そのあと、棚の整理を命じ、アレックスはこの店で働くことになります。

ご存じのとおり、『オリエント急行殺人事件』の犯人は乗客全員ですから、アレックスは取引に勝ったことになり、それなら働かなくていいはずです。

この個所をどう解釈すればいいでしょうか。

【越前の解釈】

一般に『オリエント急行殺人事件』の犯人は「全員」として知られているが、実はこの作品は多重解決の結末を用意している。くわしくは作品そのものを読んでもらいたいが、ポアロは最後にふたつの解決を示し、最終的にどちらか一方を選ぶよう警察関係者に言う。そのふたつが示されたあと、警察関係者はある理由から、どう考えても正しそうな解決（全員が犯人）ではなく、もうひとつの解決を選び、この事件は一件落着となる。つまり、厳密に言えば、この作品の正しい犯人は全員ではない。その結論に忠実に従えば、アレックスは取引に負けたのだから、映画でのやりとりは論理的にまちがっていない。

【ある書評家の解釈】

アレックスは、この本を途中までしか読んでいないので結末が知りたかったと言ひ張るが、書店主の問いに関し、「全員が犯人」だと答えることで、最後まで読んだことがばれてしまう。つまり、万引きの理由を「結末が読みたいから」と言ひわけしたことが嘘だとわかったため、書店主はそれを罰するという意味で、書店で働かせる。

【ロワンサル監督の回答】

ジョルジュは、どうしてこんな子供がまだ半分しか読んでいないというのに『オリエント急行殺人事件』の真実を知っているのかと疑問に思います。偶然なのか、それともアレックスが幼き天才なのか。ジョルジュはそれをたしかめたくなり、アレックスに質問をしたうえで、まちがった答を言ったと信じさせ、そうやってアレックスといっしょの時間を過ごせるようにしたのです。やがて、ジョルジュはアレックスをそばに置いておいたのが正解だったことを悟ります。なぜなら、アレックスは文学の天才だったからです。

『オリエント急行殺人事件』は、世界じゅうで知られている古い作品で、映画やテレビへの翻案もたくさんなされているため、乗客全員が犯人であるとだれもが知っています。ですから、この映画で謎解きの楽しみを奪うようなことはしていません。いわばタイタニックの結末のようなものです。

しかしわたしは、アレックスが答を出したときのジョルジュの反応を中立的なものにしました。それによって、(オリエント急行の)本を読んだことがない人、映画版やTV版を観たことがない人が、この少年はまちがえたから罰を受けるべきだと思うようにするためです。

(質問にあった) 2つの解釈はいずれも可能です。

最後に、『オリエント急行殺人事件』と『9人の翻訳家 囚われたベストセラー』は似た構造の作品だと言っておきます。どちらの作品でも、犯人はグループだからです。